

新刊紹介

D. T. Suzuki:

The Training of the Zen
Buddhist Monk,

Kyoto, 1934.

著者がその英文「禪論集」に於いて論ぜらるゝが如き禪經驗が如何にして實際に禪の専門道場に於いて養はるゝかを説明してゐるのが本書である。著者の主張は「東洋の研究、殊に日本人の性格及び文化の研究には禪の研究を等閑視し又は全く無視するが如きはあつてならぬ事である。禪は東洋人獨特の產物として只單に理論的に研究せらるゝばかりでなく、禪堂生活に於いて見らるゝが如き實際的方面をも併せて研究せねばならない」と云ふにあつて、本書の執筆の動機がこゝにある。表題の示す如く本書は「禪僧の鍛錬法」を説けるものであつて、その内容は1、入寮、2、謙下の生活、3、作務の生活、4、奉仕の生活、5、祈りと感謝の生活、6、坐禪の生活、7、附録、附録中には、十佛名や、禪堂に於いて誦せられる諸種の偈文、龜鑑、日用規則、延壽堂規定、常住規則、且過規則、入浴規則、及び諸種の鳴器の圖解説明が入れられてゐる。これは確かに「釋堂生

活概説」である。

禪の語録や禪話に親しむ人は一般に多いであらう。が併し禪堂生活の内容、禪の眞面目を發揮せしむる道場に於ける雲水の生活を知るべき好箇の材料は殆んど持ち得ぬであらう。著者は之に應ずる立派な解説を與えてくれた、然も禪僧達をも魅了する構想の下に、文獻的知識を豊富に織り込んでゐる。本書は先づ適度な禪の概念を與へた後一人の僧を仕立て、これが行脚の旅に出づる所より僧堂に入るを許されて漸次その心革發明に努力する過程を順序立て、きび／＼と論ぜられてゐる。各章の終に問答、商量の數箇が附せられ、作務、病等、犬、死、謙下、鐘等それ／＼の小項目に關聯して古禪師の實地的教育の話題が與へられてゐる。これが別して重要であり、又興趣を唆る。加ふるに實地踏着的禪僧、禪忠氏の筆になる特殊な趣きのある四十三葉の挿畫があつて著者の説明と相俟ち、よく場面々々を活かしつゝゐる。通俗的なものゝ如くして卑近ならず、體驗呼ばはりの逃避なくして穿つ所は穿ち、落着いてゐて興奮を呼ぶ等品高き著作である。釋語の解説も適度になされてゐて至極便利である。

その片鱗を採つて見る、趙州の「狗子無佛性」の公案は、古來禪僧の骨身を砥つてゐる。托鉢に出れば犬に吠えられる、時には犬から痛い挨拶を受くる。禪僧と犬とは昔から因縁が深い。(十九—二〇頁)。「奉仕」に就いては報酬の念あり、又は感謝と謙下の心なき所に奉仕なし、とて無功用行を説き(三七)「死」に

就いては翠巖眞禪師の斷末魔の苦しみを以つてよく生死岸頭に遊戯する(五八)と示す。

禪宗の一大行事たる施餓鬼に言及しては、餓鬼とは不斷に食物を欲してゐる死者の靈と云はれてゐるが、これは人間の飽く事を知らぬ慾望を象徵してゐるのであらう。諸々の形式を取れる世間の貪慾心が施餓鬼で癒やされるならば此の世に淨土の實現するの遠い事ではあるまい。さすれば餓鬼とは我々ではないか？ 死者の靈とは限るまい。死者は生者の内に生き、生者は死者の内に生き、施餓鬼によつて満腹するのは我々でないかと、施餓鬼の法會は又死者と生者を含めての一大社會の現出でもある。米國の哲學者、エームスは一般に宗教に對するこの種の見方を特に強調するのであるが、之の説明を見たら定めし喜ぶことであらう。(彼の一九二九年に出た「宗教論集」一一一—一四、一〇三頁參照)然しながら著者によれば、この法會は禪宗には非本質的のものであると。

「禪堂生活」を説くが如きは極めて無味なものに終るであらう。然るに本書は全く豫想外に出て、生氣と含蓄がある。「禪論集」と表裏してよく禪の本性を明かたらしむるであらう。易行門の徒、之を見る時、易行の意義に對して新たな感懷を催し得ぬであらうか、若しも本書を少くとも教訓的に讀むならば！

(横川)

D. Goddard: Followers of Buddha. California 1934.

これは小冊である。著者は米人禪士として名あるゴダード氏、内容は「米國佛教僧伽組織草案」をも云ふべきもの、その理想と規定が詳しく擧げられてゐる。1、佛陀の生涯と教義、2、佛陀の生活法八正道、3、坐禪、4、禪の本性、5、僧伽の實際的規定、6、僧員の形成、7、奉仕と施與、著者は現在、米國に佛教の種子を下し、特に禪によつて深き教養を米人に與へんとして奮闘してゐる。彼は「高智安」と云ふ漢字名を有し、自宅に佛間を設けて彌陀、釋迦等の尊像を安置し「安心山」と呼ぶと云ふほどの熱心ぶり、「草案」中の二三を擧ぐれば、僧伽は出家と在俗の二種に分ち、男子中心にして女性に暫らく除く、出家は菜食、ミルク、卵は許す、一日二食、特に働きたる日は輕き藥石を許す。金の所持を禁ず。一般の求めに應じて無報酬労働をなす事もある。女性の訪問を好まぬ、來ても出家と會食するを禁ず。英譯「心經」を讀む。佛菩薩、聖者の名を唱ふ、それには、盧舍那佛を初め、阿彌陀佛、釋迦牟尼佛、キリスト、彌勒、觀音、普賢、文殊、地藏、阿難、馬鳴、無著、龍樹、世親、達摩慧能、ヨハネ、ヒーター、ポーロ、アシシのフランシス等ながく多い。公案制度はまだ考慮に入れられてゐぬ(氏自身は「即

心即佛」の公案を相國寺で授けられてゐる。先づ「只管打坐」に重きを置いてゐるやうである。禪堂も建てたい、日本が支那から禪師も招聘したいと計畫してゐる。面白いのは、一處不住の主義によつて、出來得べくんば大型の自動車で宿りつゝ、巡回傳道をしたい、一處定住は費用もかゝれば不便でもある、動き廻れば佛書の散布も、質疑應答も自由に出來ると云ふ事である。氏、すでに齡七十を過ぎて尙この元氣あり、米國佛教の種付き者に幸多かれと祈つてやまぬ。(横川)

鈴木大拙 校訂
公田連太郎

燉煌出土

一、神會語錄三、興聖寺本六

祖壇經

二、六祖壇經 四、各冊解說及目次

四部、一帙に納められたる美裝の活字本。第一は詳しくは「荷澤神會禪師語錄」と云ふ。神會は慧能の弟子、從來はその著「顯宗記」によつて知らる。南宗頓悟の法門樹立の爲に奮闘せしは、フックスが「內的光」の爲に戦へるに似てゐる。然しフックスの「日誌」は「顯宗記」とは全く趣を異にする。疑問の人デニスの「神名」こそ荷澤に接し得るものであらうか、それほどに智的な表現を荷澤はとつてゐる。彼の四代の法嗣宗密以後荷澤の内流

が絶えてゐるのも、鈴木博士の説かれる「支那民族心理の特異性」に依るのであらうか？

「解説」によれば、この「語錄」は全くその存在を知られざりしもの、原寫本は石井光雄氏の許にある。而してこは疑ひなく神會の問答錄たることは本文によつて知られる。昭和五年に胡適氏が「神會和尚遺集」として出版せるものは既に筆者が本誌上に紹介した所のもの、こは主として佛國圖書館藏本に依れるものであるが、鈴木博士は之と比較研究して、一、卷頭の闕文は、本書に多く見出される。二、問答の項數は大體一致するも、双方に多少の増減がある。三、各項の文字は必しも一致せぬ、胡氏本に闕字錯綜多し、とて引例あり。本書の特異性は達摩より慧能に至るまでの略傳の附記ある事、その中に神會が楞伽經を取らずに金剛經を擁護せる事が見られる。これらによつて、胡氏本と石井氏寫本は別種のものたる事によつて本書が異常の價値ある事を認められてゐる。

「六祖壇經」に就いては、今三本を有する、即ち燉煌本興聖寺本と流布本と。興聖寺本は宋版を五山時代に複製したものでらしい、之と流布本とを比較して見ると前者には「機緣第七」の大部分がないこと、併もその缺けた中に南嶽懷讓と青原行思が出てゐる、即ち懷讓も行思も慧能の弟子中に發見せられぬことで五家七宗の禪宗の系統が何に起源するか不明となる。燉煌本にもこの二人が見えぬ。

流布本には、明上座に對する慧能の言葉「不思議不思議……」

；本來面目」があるが燉煌本には全然ない、興聖寺本には第二章に小型の文字にて添註となつて見出される。これに依つて見ると「本來の面目」は「壇經」成立の當初にはなくして、その後、唐末頃に、此の句が慧能に歸せられるに至つたが、又はグロスの竄入かであらう……。

詳細な比較研究は「解説」に就いて見らるべきである、同博士は又「壇經」の編者を法海上座とみて神會作の説は退けて居られる。

これらの三本は禪宗思想史上、貴重な材料なることは云ふまでもない。綿密な研究發表は博士の手によつて近く發表せられると聞く、何れは「禪論」を飾る精華となるであらう。期して待ちたい。(横川)

鈴木大拙博士著

支那佛教印象記

著者が二ヶ月餘に亘る支那佛教視察旅行の印象談を記録したものである。「印象記」と云へば大抵讀者に落穂拾ひもさせぬのが常であるが、本書では讀者は著者自身の臨地講演の座にある思ひを懐かしめられ、始終觀察の妙味と豊かな暗示の下に現代支那の佛教狀態及びその方向を教へられるであらう。

断片的に興味ある項目を拾つて見る。火を以つて傳統を象徴する事は古代よりよく行はれてゐる。原始時代の燈火部族や、希臘移民が母國の火を持つて出かけて行つた事などは衆知に屬

する。支那では經藏に燈明を絶さぬと云ふ、經藏に限らず、方々に燈明が上られてゐる。その費用に困つてゐるとか、左溪尊者は一夜は聖典を披尋するに非ざれば、未だ曾つて空しく一燈をも乗らず」と云つてゐるが、物を無駄にせぬ禪宗精神が見える。それに支那では燈明の傳承と云ふ點では殊に著しいものがある。「それで支那から來た日本の禪宗の開山堂には燈明が絶されぬ、光はいつても意味ある象徴である」(二五頁)

「布袋さん」に就いて、著者の觀察は精妙である。これによつて支那國民の宗教意識を旨く讀みとつて居られる。即ち支那人の「樂天的、感覺的な民族性」が、諸行無常的な方面よりも法身常住の姿である布袋を尊崇せしめ、彼土救済の彌陀より此土利生の觀音を、食糧の司たる韋駄天と共に祠らしめてゐると見る福、祿、壽、こそ支那人の目標とする所らしい、この現實性が支那佛教に強く働いてゐると述べられてゐる。

この觀點の一つの例證を示せば、水陸會の項で閻魔大王に就いて「閻魔大王が大きな帳面を擴げて我々の婆娑に於ける行動を一々書き上げると云ふ事、これは支那で發達したものと信ずる」と、曾つてライヘルトの「中國佛教源流考」九五頁に、孟蘭盆會の項中、紙製の陰陽司が幽明の聯絡を司る故にか、その顔を黑白、半々にしてあると記されてゐるのを見たが、今この觀點を興えられて新たに興味を覺ゆる。僧、俗、若き女性の燃指供養や(一七一八頁)道教と佛教の關係(七三)等多くの問題が鮮かに論ぜられてゐる、が此處で妄りに粗述して著者のデリカ

な思想構成を壞すことを欲しない。然しながら今一つ吾等にとつて重要な問題があるのでそれだけを簡潔に述ぶることを許して貰ふ。著者は語る、

支那の佛教は大體念佛禪である、然し禪が亡びて念佛が残つたわけでもない、機(き)の差別があつて禪徒が上根だとしても淨土を願ふ心がなくては一般に宗教は成立せぬ。淨土を願ふ心は宗教意識の發動である。それで念佛禪として發達すべき理由が禪そのもの、内にある。更に支那では眞言宗が亡んで陀羅尼が禪の中、念佛の中に殘存してゐる。それで一面から見れば念佛に陀羅尼の分子がある。これによつて南無阿彌陀佛は、念佛であり陀羅尼であり又禪の公案でもある。この點も考ふべきである。又禪が段々念佛に變つて來たと云ふ事には、如何にも目で見、耳で聞くことの出来るやうに極樂世界が展開して行くと云ふ所に支那人の心理に強く訴へる所があると見られぬか、それにしても支那に眞宗が發達せぬのは如何なる理由か、念佛宗は最後はどうしても眞宗にならねばならぬ、印度にもキリスト教にも絕對他力はあるが、支那にない、若しこゝまで來れば支那佛教は一大展開をすると思ふ。眞宗の人はその歴史的發生事情に心を何時までも止めずに、寧ろ宗教心理の立場から見て行つてその點から支那の佛教徒に接して行けば、眞宗の妙味も彼等に會得せられる日が來ると思ふ、眞宗を知り禪宗を知り、それが支那の民族心理に合體する時、眞禪兩教徒と支那の佛教徒が提携してゆく機會が來ると信ずる。」と。蘇州報國寺で印光和尚に

眞宗は如何と著者が尋れた時、「肉食妻帶の眞宗は佛教に非ず」と一言に退けたと云ふ。現状は是である。

尙公案念佛の説明がある、が之は略する。

實際的にも又學的にも本書の如く、廣く深い考察の盛られた「印象記」は殆んど無いであらう。具眼の一評者は之を「佛教概論」だと云ふ、體驗誘致的な點では、それ以上だと見たい。ニートな裝釘、開明な活字、眞に心地よく、尊とい「土産」である。布袋の像影、著者一行の寫眞數葉の附せられてゐるのも良き記念である。(横川)

東洋文明史論叢

桑原 隲藏 著

故桑原博士の生前發表された論文中、主として東洋文明及び東西文化の交渉に關する研究を蒐録されたものが本書であつて既に刊行された東西交通史論叢、及び近く發刊されると聞く東洋法制史に關する論叢とともに博士遺作集の三部をなすものである。收むるところ十三編、一、歷史上より見たる南北支那(白鳥博士還曆記念東洋史論叢所收)數千年に亙る支那の歴史は一面より見れば支那文化の南進の過程である。即ち北支那に發達した文化は時代の推移とともに南へ南へと移動したものであつて、かゝる傾向の一大機縁をなしたものが晉室の南渡である。これ以前に於いては社會百般の上に於て南支那は到底北支那に對立し得べきも

のではなかつた、然るに晉室南渡後東晉南北朝に至れば南支那の開発非常に行はれ北支那を凌駕するものさへあるやうになつた。其後時代の経過と共に南支那は何れの點に於ても發展したものであつて、戸口も多くなり、將來の支那にとつて北支那より重要な位置を占むべきことを主張せられしもの、二、紙の歴史(藝文十ノ九、十所收) 人智の開発と文化の促進に多大の貢獻をしでゐる紙の歴史を論ぜられたもので、先づ紙の發明以前に於ける書寫の材料より説き起されて、東漢の蔡倫の製紙法發明の次第を論じ、更に此の製紙法の西方傳播の次第を述べて、古紙研究の材料に論及されたものである。三、經子に見えたる宋人物とされてゐる。何故に宋人は周人より、かく觀られるに至つたかを歴史的に論ぜられたもので、博士は、凡そ宋の都は商丘で殷の王室と古き關係があり、その餘澤の尤も深い土地であつて、宋人は殷に對する執着心と周に對する敵愾心とにより、必要以上に殷の舊慣故習を固守したものであり、それが春秋戰國の交まで續いたものであつて、爲に宋人は世間の注意を惹き、宋人と云へば、頑冥の人物を代表するものと考へられるに至つたと主張されてゐる。四、支那人間に於ける食人肉の風習(東洋學報十ノ四ノ一所收) マホメット教徒の極東見聞録たる「印度支那物語」の記載の正否を検討する爲に、多数支那側の材料を蒐集して、この蠻風の原因として、饑饉、籠城、嗜好品、怨敵の肉を食ふ

風習、醫療用の五つを舉げて、この風習が、外國傳來のものか、若くは支那固有のものであるかは容易に決定することは出来ぬが、たゞ古き過去より可なり普通に支那人間に存在してゐたことを論證されしもの、五、唐宋時代の銅錢(歴史と地理十ノ三ノ一所收) 銅錢も海外流出が宋代に於ける經濟上の大問題なることを指摘されしもの、六、長安の青龍寺の遺址に就いて(史林十二ノ三所收) 石佛寺を唐の青龍寺の舊址とする嘉慶咸寧縣志の説を否定された常盤博士の論文「我が東台兩密の發源地たる唐の青龍寺につきて」に對する痛烈なる駁論にして、文獻の上より論證すれば、咸寧縣志の説の動かす可らざることを述べられしもの、七、司馬遷の生年に關する一新説(史學研究一ノ一所收) 張惟驥の元光六年説、王國維の中元五年説に對して、博物志の記載により建元六年説を立てられしもの、八、隋唐時代に支那に來住した西域人に就いて(内藤博士還曆祝賀支那學論叢所收) 約百五十頁に亘る博士晩年の力作、最初に波斯の商人の來住の有様を述べ、祆教、摩尼教、景教、猶太教の傳來宣教の狀態を論じ、更に印度よりの影響を述べ、次で有名な西域出身の人々の來住の有様を饒多なる史料を巧みに用ひて詳述し、最後に此等の人々のもたらした西方文化の影響を略述せられたものである。九、明の龐天壽より羅馬法皇に送呈せし文書(史學雜誌十ノ三、五所收) 天主教に關する文書を紹介されしもの、十、創建清眞寺碑(藝文三ノ七所收) 陝西、西、安府清眞寺にある碑は回教傳來を記した最古の碑であるとして、珍重され、碑文に據ると唐玄宗天寶元年の建設とあるも實は明代の再建にかゝる

ことを論證されしもの、十一、支那人を指すタウガス又はタムガジといふ稱呼に就いて(史林七ノ)タウガスが如何なる言葉よりの轉訛であるかに關しては從來、大魏說、唐家說、拓跋說等があつたが唐家子に比定するが音韻上尤も無難なることを述べられしもの、十二、支那の記録に見えたるイスラム教徒の猪肉食用禁制(史林八ノ)十三、新に發見されたカトリック教の宗論關係の二史料(史林十一ノ)兩文とに史料紹介を目的とされしもの。

右は各論文の要旨である。卷頭に著者壯年時代の寫眞、及び羽田博士の序文、卷末に索引が附されてゐる。(菊版五一七頁、定價參圓八拾錢、弘文堂發行)……(野上)

尊經閣文庫漢籍分類目錄

舊金澤藩主前田侯爵家内の前田育徳財團にては從來同家所藏の尊經閣文庫中の善本佚書を排印複製せられて學界に寄與せられたが、今回其中の漢籍の目錄を編纂出版せられた。元來此尊經閣は前田家中興の祖第五代松雲公前田綱紀により命名せられたもので、公は其英邁の資を以つて、一代の碩學林鳳岡、朱舜水と交を結び、木下順庵を延いて師として程朱の學を研鑽せられたが、晩年人を奈良鎌倉に派して、珍籍を購ひ難きものは此を借り、或は謄寫せしめ、或は抄錄せしめ、價値の極めて大なるものは一字一畫も原本の儘精寫せしめた。現存の兩京新記

の古鈔本、春秋左氏音義、世說新語、沖虛至德眞經等の宋板に金澤文庫の印あるに依つて其由來するところを窺ふ事が出来る。公は亦對馬の宗家に托して朝鮮支那の善本を求め、かくして遂に幕府の紅葉山文庫と共に蔚として海内の二大典故となつたが、其後屢々祝融の災を蒙り、亦幕府への進獻、諸家への贈遺等のため百數十十年間に其幾分を減じたのみならず、維新廢藩の際、散逸して所在を失へるもの有之も尙且數十萬部の藏書を有し、其中稀觀の逸品、絶無の珍書を夥しく存することは、誠に神物の加護により、其所を得たるものと云ふべきである。抑本書日は菊判一千百五十頁の浩濶なるものにして、前廣島高師教授三宅少太郎氏が十數年の年月を閲して完成せられたるものなり。然して其分類法は全く氏の一家の見解により從來通行の漢籍目錄と其撰を異にしてゐる。即全部門を經、史、子、集、雜部に分ち、更に各部を各類に細別してゐるが經、史、子、集の五部には他の漢籍目錄に比して大なる差異を認めないが、但雜部に於て、此を更に類纂、雜纂字書、目錄、金石、器物、服食、動植、合編、合刻、分抄、分選、書抄、叢編、輯逸の各類に分つてゐるところに編者の苦心を存することを窺ふことが出来る、然して此の如き分類法が果して妥當であるか否に就ては支那在來の如き複雑なる學統、夥多の典籍に就ては輕々しく論ずる事は出来ないが、四庫全書總目、八千卷樓書目等に視慣れた吾人には些新奇の感を與へるものである。次に本目錄を瀏覽して、其古鈔舊槧の豊富なるには思はず鴻敷を發するものであ

るが、以下其中管見の及ぶところ二三部を誌して此書紹介の詞
としたい、玉燭寶典(全十二卷、缺卷九、國寶、貞和四年書寫、
唐土の佚書、七一六頁所載)兩京新記(存卷三、舊鈔本、國寶、
唐土の佚書、二〇三頁)黃帝內經太素(存卷十九、古鈔、仁安三
年書寫、唐土の佚書、二五〇頁)重廣會史(一百卷、北宋版、唐
土の佚書、七二〇頁)冲虛至德真經(八卷、宋板二五一頁)其他
明板の地誌書多數を藏す。(幸)

眞宗史之研究

山田 文昭 著

眞宗史研究の門戸を開き而も眞にそれが學的基礎を與へられ
し第一人者は故山田文昭師であつたといつても敢て過言ではあ
るまい。然し同師の眞宗史研究に關する論文並史料等が今迄綜
合的に上梓せられてゐないことは非常に惜まれる點であつたが
今回、同師の友人門弟の人々に依つて既發表の論稿と俱に未發
表の論稿史料等迄その遺稿の全部が公にせらるゝ運びになつた
ことは斯學界の爲めに大いに慶賀すべきであらう。

茲に紹介しようとする「眞宗史之研究」は前學報に紹介された
「眞宗史稿」に續いて刊行せられしもので、それが姉妹篇とも名
づくべき著書である。固より本書は故人の遺稿を蒐集編纂した
ものであるから全般的組織等に關する批判的言辭は避けること
として本書の内容を簡単に紹介しよう。本書は次の如く三篇よ

り成つてゐる。

第一篇 眞宗史の研究

第二篇 祕事法門の研究

第三篇 解題並史料

先づ(第一篇)は正しく眞宗史に關する研究論文であつて、そ
れは編者が其凡例に記してゐる如く第一卷「眞宗史稿」の核心を
成するものといふべきであらう。其項目は(一)親鸞聖人と越
後(二)晩年に於ける親鸞聖人の半面(三)親鸞聖人の儀式觀(四)大谷本
廟創立考(五)親鸞上人より覺知上人に至る眞宗教團の史的概觀(六)
存覺上人父子の義絶に就て(七)本願寺と勤王(八)長福寺慶考(九)教行
信證の御草本に就て(一〇)御文と成立と開版等に分たれてゐる
が、孰れも既に無盡燈、宗報等の雜誌に發表せられたものを收
載したのである。(第二篇)は眞宗教團内に簇生したる祕事法門
に關する研究であるが、その初に先づ高田派の所傳といはれる
「眞慧上人より眞智上人へ傳へたる十箇の祕事」が紹介せられ、
次に「祕事法門の梗概」として宗祖・覺師・述師の時代より寶
曆・明和の時代に到る祕事法門の沿革を舒べ、終に現代に蔓衍
せる祕事法門に就て言及されてゐる。(三)に「祕事法門の研究に
就て」と題して、史料蒐集・史的概觀・教義混亂等の細目に分
たれて、該研究に關する方法論やそれが批判的態度等を解明
し、(四)に「祕密聖典解題即ち祕事者の依用せる「心血脈抄」「安
心決了抄」等の十四部の典籍に對する解題が行はれてゐるが、
孰れも祕事法門の研究上參考に資せられ興味あるものである。

〔第三篇〕は初に信濃松本正行寺所藏の「彌陀如來名號德」の解説があり、(二)同師の祖蹟探訪史料として「宗祖並門侶遺蹟」〔「祖蹟踏查日程」〕「祖蹟文獻並探訪史料」〔「祖蹟探訪史料寫真目錄」〕等が擧げられてゐるが、これは未發表の遺稿で同師の手控として「巡禮雜記」〔「祖蹟探訪史料」〕と題するノートより彙編したるものといふ。次に既發表の(三)「常陸在住宗祖門侶遺蹟考」(四)「光明本尊調査」(五)「三本對照親覺聖人門侶交名牒」等の幾多史料を收載され、斯學研究者を裨益すること尠しとせない。最後に日下無倫氏の編に係る同師の略年譜が附載されてゐる。

以上本書の概要であるが、その内容に於いて凡てが純學的のもののみといふ譯でなく中には所載雜誌の性質によつて純學的にあらずるものゝ存することは諒とすべきであらう。然し宛も角本書全般を通じて同師が眞宗史研究に對して如何に眞摯であり且つ造詣深かりしかを窺知せしめられ、そこには同師生前の學的勞作がよく想察せられる。爰に本書の内容を紹介してそれが斯學研究者の必讀の良書たることを推奨して止まない。(破塵閣書房發行、菊版三九四頁、定價金參圓五拾錢)(斧山)

金子大榮著

佛教の諸問題

「こゝ數年來、私は佛教の研究法として問題を中心とする方法を取つた」と著者が本書の序に語つてゐる事は、本書の題目と俟つて、本書の行き方を、大體に知らして呉れる。

暫らく、それが内容を瞥見するに、第一篇教理史論は一代佛教の概觀をなし第二篇智慧は、一般に言ふ知識と佛教の智慧との交渉を論じ、第三篇世界觀に於て、三世因果の道理を意義づけ第四篇煩惱に於て、あるがまゝの現實なる自己反省にのみ佛道のある事を論じ、第五篇普賢行は、その佛道としてあるべき相、願はしき行を明らかにしてゐる。

今、茲に思ひ合はさるべきは、著者が曾つて世におくれる佛教概論なる著である。即ちこの書に於て、教相學、教理學、修道學の名の下に、佛教概論の方法を考究し、佛教の開顯せんとする眞理の世界を辿り、その眞理實現としての菩薩道を説き、佛教の根本精神の開顯、諸教學を統一せんと試みた事であつた。然れば本書に諸問題として取上げた問題も、佛教概論にありて已に一度は論及せられたるものであつた。抑も、經と緯との傳統に生きる佛教は、蒼穹の如く滄海の如き無涯底の哲學と思想を有つものである。されば佛教の保有する問題は數に於ても限らない筈である。本書に摘出せられたるものは、學徒として問題とせらるべき樞鍵のものを論究せる點に於て、後學を裨益する處多く、學界に貢獻するところ又、大なるものがあらう。

本書の仔細に汎る紹介批評は、こゝに能くする處でもなく又却つて差控へる可きだと思考する。唯一言附加したいのは、著者の學に對する態度である。それを裏づける求道的敬虔と眞摯なる精進と熱意に對し、限りなき畏敬の念を惜しむものでない。

著者、去りし日、想ひ出多く京洛の地をあとに、篋を負ひて居る廣島の地に移した事であらう。そうした心境にありて執筆せる本書である事を想ひ、善財童子の求道を貫く、菩薩普賢行てふ唯一の問をもつて終始せるこそ、法界に分け入る者の喜びであらうと、筆を進める邊り、吾人をして、本書に對する懷しみを深くさせる。(自見直)

(菊版四七五頁、東京、岩波書店 定價貳圓八拾錢)

惠谷隆戒氏著

略述淨土教史

從來淨土宗史の一般を概説する二三の書があつた。然し是等の書も夫々補ふ可きは以て補ひ、改むべきは以て改むる機に到れる様に思考してゐた。特に先般、金澤文庫より淨土稀觀典籍の夥しき發見せられるよりしてその感を深くして來たのであるが、今、惠谷氏の略述淨土教史の出さるゝを見て、これ有る哉の喜びを覺ゆるのである。これは一人筆者のみであるまいと考へる。

暫らく本書の内容を窺ふに序論に先づ方法論を規定してゐる。進んで本論に至れば開創期、持續期、大成期、革新期の名の下に宗祖立教開宗より今日に至る宗史を區劃し、つとめて、これを文化史的視角より論述せんとしてゐる。されば一言以て言へば、本書は學的和言ふより淨土宗史の新たな整理であり吟味である點に特色がある。著者が初學者の宗史研究の手引としたいと舒べてゐることに於て成功してゐると思はれる。

尙、本書には附録として淨土宗史研究參考書を載せてゐる。概説的參考書、宗祖傳研究參考書、歷代諸師傳研究參考書と分類して、書名を擧げて要領よく解説が附せられてゐる。これ又頗る初學者を益するものと見たい。仔細に汎つて述べる事は本餘白の能くするところでないから、少々希望を舒べて紹介の責めをふさぎたい。

凡そ宗史研究は宗義研究の必須なること、離れるものでない。換言すれば宗義をして生かしめるものこそ宗史の研究であらねばならぬ。然るに兎角宗義に煩ひされて宗史の正鵠なる生長を碍ぐる事のあるは如何であらうか。最後に希望したいのは純研究的、なる體系的淨土宗史の一日も早く刊行せらるゝ事である。(自見直)

(東京神田文淵堂發兌、菊版二百五十頁)

如說院慧劍師記

未燈 信行 一念章錄

宗學研究叢書第二編

大谷派宗學院に於ては、曩に、宗學研究叢書第一編として、楠潛龍師の「御文摘要」を出した。今第二編として慧劍の信行一念章錄を出すもの即ちこれである。慧劍は近江、本啓寺の人、學系の上から言へば深勵門下であり、その著述二十四部の多數がある。

本書の校訂等は一切は大谷派本願寺宗史編修所藏の自筆本によるもの、如くである。よき講録を斯くの如く複製して、吾人

の前に提供せられる事は、末學として欣喜これに過ぎるものはない。惟ふに宗學院同人のかくれたる努力に依りて、吾等温古知新の喜びを享け得るのである。左に目次を記しておかふ。

目次

前編 行信の要義

玄談

第一章 能所の分別

第一節 所行能行對

第二節 所信能信對

第二章 一多の分別

第一節 信の一念多念

第二節 行の一念多念

第三章 因論相承同轍

第一節 合糅諸文

第二節 示師資同轍

第一 就教法示

第二 約信相示

第三 正示同轍

第四 信後行業

後編 入文解釋

(發行所 法藏館 定價八拾錢)

(自 見)

研究室彙報

眞宗學研究室

十月二十日(土) 午後一時より會議室に於て例會を開く。講師及講題左の如し。

一、善導の念佛

長尾 哲夫君

一、隆寛の三心義

黒谷智慧丸君

十月三十日(火) 午後三時より會議室に於て左の如く例會を開く。

一、往生の意義

椿井 隆信君

十一月一日(木) 史蹟踏査をなす。

目的——祖靈の御往生地實地調査のため。會する者教授學生合して約三十名、午後三時散會す。

十一月九日(金) 午後三時より會議室に於て左の如く例會を開く

一、眞宗に於ける滅罪義の検討

島 秀英君

一、惡人正義に就いて

朝 順一君

十二月七日(金) 午後三時より第三教室に於て左の如